



日本の戦闘者



荒谷 卓（あらや たかし）
生年月日：昭和34年秋田県出身
略歴：昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職（1等陸佐）。海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊―最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動じない力』三笠書房
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>

044

俺は、これまで36カ国に渡航したが、実際に海外で生活したのは、ドイツに2年、米国に1年だ。1ヵ月以内の短期滞在は、自衛隊の公務出張と明治神宮武道場館長として武道指導での業務出張、そしてプライベートの旅行だ。海外に行くと、行った先で感化されてそちらに居つく人と、あらためて日本人としての自覚を持ち日本に愛着を持つ人がいるようだ。俺は当然後者だが、私人としてはともかく、公職に係る者が日本より他国を愛するようになると国家の害悪に成る。例えば、米国をはじめとする多くの国では、国策として海外からの留学生を受け入れているが、その目的は『自らの価値観の啓蒙』である。つまり、他国に自分たちの価値観を持つ人間を養成するのである。これは、古典的諜者養成の手法で、中世の欧州では宗教による改宗がそれである。現代においては、米英等の大学や研究機関でのグローバルIST養成（いわゆる「売国奴」養成）が世界の主流である。もちろん、日本人として自立した価値観を確立している者は、留学先でいくら啓蒙教育を受けても問題がないのだが、戦後の日本教育では、日本国民に日本人としての自覚と伝統的価値観を全く教育しないものだから自虐史観の日本人が出来る。この自虐史観の日本人は、ちょっと理論的な説明を受けると、簡単に他国の間者になってしまう。しかも、金や女で買収されている者と違って、理論的に取り込まれた者は自分が売国奴であることに全く自覚がない。最近では、戦後保守系のメディアなどが、親中・親露的発言をする政治家や役人を「中露に取り込まれた売国奴」のような言い方をするが、米国の管理下にある戦後の日本政府においては、中国やロシアの間



国際特殊作戦会議でのスピーチ。



ロシア防衛交流での武器展示。

者は絶対に出世できない。ところが、米国の間者は当たり前のように出世コースを歩む。この人たちは、日本を売り飛ばして、出世して、自分は正しいことをしていると認識しているから厄介だ。だから、海外留学経験者で、留学先の国とそこで習った理論を自慢気に吹聴し、日本は遅れているから変えなきゃいけないなどと言う奴は気を付けたほうがいいよ。こんな話をしていても腹が立つばかりだから、こらへんで止めておく。

俺の自衛官時代の海外出張は、ほとんどが国際防衛交流というものだった。これは、2国間交流もあれば多国間の枠組みもある。目的は、国際政治における信頼醸成のためだ。国際政治の中でも、軍事はとても重要な分野だということは言うまでもない。日本だけは、この機能が欠落しているので、国際政治が出来ない仕組みになっている。だから、いくら経済大国になろうとも、国際政治力は弱い。それだけではなくて、軍事常識が欠如しているから国際関係が読めない。中国が台湾に侵攻するとか、ウクライナがロシアと対等に戦えるなどという非常識なデマが罷り通る。そもそも、自立した軍事機能が欠落しては独立国家足り得ない。話を元に戻すが、国際政治において、相互不信による軍事衝突を回避し、軍備競争や無用な緊張を緩和するため、軍事当事者間の対話は必要不可欠である。冷戦後は、軍事面での国際協調も積極的に進められ、平和構築のためには軍事力が大きな役割を果たすようになってきていた。それが、今回のウクライナ問題で木っ端みじんに吹き飛んでしまった。

俺は、平成9年（1997年）から平成15年（2003年）まで陸上幕僚監部防衛部及び防衛局防衛政策課に勤務している間に、英国、ドイツ、フランス、ロシア、中国、韓国との2国間防衛交流、並びに、テロ特措法の対米協力の為の日米交渉等を担任した。また、特殊作戦群長間は、米国SOCOM、英国SAS、ドイツKSK、オーストラリアSOCOMとの2国間特殊部隊防衛交流、並びに、世界特殊部隊対テロ会議、太平洋特殊作戦テロ対処会議等に参加した。こうした防衛交流では、相互に自

国の防衛構想・編成装備・制度・予算等について説明し、訪問先の国は、実際に部隊視察、装備品の展示説明、訓練展示等を準備してくれる。こうした防衛交流に参加すれば、お互いに、透明性を高め軍事当事者間の信頼醸成を進めようという姿勢が感じられるものだ。特に、冷戦間に対立していたロシアとの将官クラス防衛交流などは、冷戦間の誤った相互認識の修正などにとても役に立った。例えば、ソ連軍が北海道・東北に攻撃してくることを想定していた日本の認識は全く根拠のなかったことや、「オホーツク海の聖域化」等という構想はソ連にはなく日本側の妄想だったことなどが明確になった。中国軍の部隊視察においては、中国陸軍の部隊予算が国家予算だけで賄うのではなく、部隊自体が農場経営や工場経営をしてその収益を充てるなどということを知り、軍事訓練などに専念できない中国軍の特殊事情などが分かった。特殊部隊間の交流内容な公にはできないが、レギュラーフォースとは違って、国によって特殊部隊の雰囲気は全く異なりその国の政治特性に応じた特殊性を有していた。共通するのは、どの国の特殊部隊も、国家の肝いりの部



USSOCM副司令官と（タンパ）。



オーストラリアSOCOM司令官と（シドニー）



ドイツKSK訪問記念（カルフ）

隊であるということは、その施設や機器を見ればよく分かった。また、特殊作戦指揮官は、国家の政治意志決定者と近い存在であり、オーストラリアSOCOMの司令官などは、アフガニスタンでの作戦の定例記者会見では常に首相と隣り合わせで対応していた。

特殊作戦群が創設されて、日本ははじめて国際特殊作戦部隊コミュニティのメンバーシップを持つことになった。グローバルな国際政治問題に対応するこの特殊作戦部隊コミュニティは、緊密に情報交換をしており、特にテロリスト関連の情報は、個体情報として「いつ、だれが、何処で、何をしたか」というようなことがらを、国境をまたいでリアルタイムで把握している。そのような、国際特殊作戦部隊会議に、日本代表としてははじめて参加した俺は、挨拶がでらスピーチする時間を貰った。俺のスピーチの中でバイオテロについて話をしたのだが、内容が、その14年後に起こった「世界的コロナ騒動」に似ていたせいか、スピーチの後いろんな国の代表と内容の深い議論が出来た。当時から、特殊作戦関係者の間では「世界的コロナ騒動」のようなバイオテロは当然有り得ることとして認識されていたことだな。1997年にドナルド・ラムズフェルド、ディック・チェイニー、ポール・ウォルフォウィッツ等が立ち上げた「アメリカ新世紀プロジェクト（PNAC）」の報告書でも「特定の遺伝子を狙い撃ちするような最先端の戦争が可能になれば、細菌戦争はもはやテロではなく政治的道具として使われることになる」（アメリカの防衛再建―新世紀のための戦略・軍勢力・資源、2000年）とちゃんと明記してあるよ。

特殊作戦コミュニティのメンバーシップにはロシアは入っていないが中国の特殊部隊は入っており、国際関係の仕組みを見るのにも役に立った。面白かったのは、米国フロリダ州タンパで開催された「世界特殊部隊対テロ会議」に出席した時のことだ。クロージング・セレモニーにチェイニー副大統領（当時）が参加すると



世界特殊作戦会議（タンパ）にて。※赤丸が筆者

いうニュースが1日前に流れた。と同時に、宿泊会場のホテルには、館内放送で「カーテンを完全に占めて、絶対に開けるな」という放送が流れた。カーテンを閉めながら外の様子を確認すると、会場から見える全てのビルの屋上にスナイパーが配置され、カーテンの閉まっている部屋にはスコープが向いていた。食事をとるため部屋の外に出ると、昨日まではかわいい女の子だった掃除スタッフやルームサービス、レストランのサービスまで全て無線機とハンドガンを装着したサングラスのタフガイに入れ替わっていた。後で聞くと、チェイニー副大統領がワシントンD.C.を出るときからタンパにつくまで270名以上のシークレットサービスががっちり警護しながら同行してきたのだそう。アメリカの副大統領というのは、国内でもそれ程警備を固めないと思いきや、出歩くことが出来ないということだ。セレモニー会場では、俺はチェイニー副大統領の真ん前の最前列に座った。その間をアメフトのディフェンスのようにシークレットサービスが固めてこちらを睨んでいる。彼らもかなりビリビリしている。何しろ、世界中の特殊部隊指揮官などテロ対処関係者が300名程集まっており、国によっては、つい先日までテロ組織のボスだったやつものだからしょうがない。下手に、制服の内ポケットなどに手を入れたら射殺されそうな空気観だった。チェイニー副大統領がお出ましになり、いきなり発した言葉が「今ここに参加している国の代表はラッキーだ。もし、ここに来ていなかったら、テロ国家がテロ支援国家とみなされていただろう」ときたもんだ。さすが、ネオコンの親分ともなうことが違う。国際政治の実態がよくわかる出来事だったよ。こうした米国のグローバル・エリートの自己利益優先主義が世界をばろばろにし、遂には同じグローバルでネオリベの親分バイデン大統領の自己過信による暴走によって、米国が分裂し自滅しそうになっているということだな。欧州や中国の歴史をで練り返される典型的大国の末路だ。こんな奴

等が自滅するのは自業自得だが、これに付き合っただけで日本までもが終了してしまわないように、日本の戦闘者たる者はしっかり働かなくてはならないな。

045